



立命館大学 経営学振興事業だより Across

GUEST
—ゲスト—

齋木 勲氏

齋木産業株式会社 代表取締役
滋賀県真珠養殖漁業協同組合 組合長
1964年(昭和39年)3月 立命館大学経済学部卒業



真珠と琵琶湖と生きる ～淡水真珠養殖の栄枯盛衰～

[聞き手] 小沢 道紀 立命館大学スポーツ健康科学部准教授(立命館大学経営学部校友会幹事)

1. 真珠養殖の概要

<小沢> まず、真珠やその養殖について知らない人も多いと思いますので、そのあたりの概要から教えて頂けますか。

<齋木> そうですね。あまりご存じない方も多いかと思いますので、真珠の概要からお話ししようと思います。真珠は、貝によって創られるもので、自然に創られていくものになります。例えばアワビの貝殻の内側は、キラキラしているでしょう。あのキラキラしているものが真珠層と言われるもので、それが貝殻の表面だけでなく、貝の中で形となって出てくると真珠となります。自然界では、偶然によらないと真珠はできないのですが、これを人工的に創れるようにしたのが養殖真珠となります。

<小沢> 養殖真珠の場合は、どうやって人工的に創られるようにするのでしょうか。

<齋木> 単純に言えば、真珠を作れるような貝に、意図的に異物を入れて、それで真珠層を作らせます。自然界でも同じで、偶然貝の中に異物が入れば、それで真珠ができる可能性があります。

<小沢> もう少し詳しく説明してもらってもよろしいでしょうか。

<齋木> そうですね。もう少し詳しく説明すると、他の貝から取った細胞（貝の身の一部）を、真珠を創らせたい貝の中に入れます。そうすると、自分の体ではない異物が身体の中に入りますので、それから身を守ろうとして、守るために真珠層を貝が自ら創ります。この真珠層が細胞を包み込んでできる事で、貝の内側が光っているのと同じように、輝く真珠ができます。

<小沢> 具体的に、どのようにして細胞を入れるのでしょうか。

<齋木> 真珠の母貝（真珠を創るための貝）が死んでは、当然真珠ができませんので、しばらく水につけておいて貝の口を開かせ、その隙間から細胞を中に入れていきます。けっこう細かい作業で、1cmに満たない隙間から中を覗き込んで、狙ったところに細胞を埋め込みます。

<小沢> どんな細胞を入れるのでしょうか。

<齋木> 入れる細胞は、外套膜と言われる部分の一番外側の貝殻を成長させる部分から取ります。養殖には2枚



小沢道紀准教授



真珠のオペ作業の様子



<写真提供：草津市 >

貝を使いますが、この2枚貝の口に近いところにある部分です。これは、ホタテガイでヒモと言われる部分になります。この外套膜を外して、表面の余計な筋肉をそぎ落とした上で、貝殻を作る内側の細胞のみを使います。

<小沢>入れた後はどうするのでしょうか。

<齋木>入れた後はしばらく落ち着かせてから、成長させるための棚へ移動させ、真珠貝を成長させて、頃合いを見計らってから真珠を取りだします。

<小沢>と言う事は、途中で真珠のでき具合を確認する事はできないのでしょうか。

<齋木>母貝から出てしまえば、もう一度埋め込むことはできないですし、母貝が死んでしまえば真珠膜は作られなくなりますので、最後に真珠を取りだすまで、どんな真珠ができているのか、確認する事はできません。母貝を開けるまでは、良い真珠ができているのか、それともボケ玉（輝きの少ない真珠）なのか、形はどんなになっているのか、そういう事は全くわかりません。真珠の養殖は、けっこう時間もかかりますし、珠出し（真珠を出すこと）をしなければどれぐらいの金額になるかもわからないので、けっこうリスクは高いですね（笑）。



2. 海水真珠と淡水真珠の違い

<小沢>お話を聞きしていると、どんな貝からも真珠ができるように思われますが、どうなのでしょうか。

<齋木>貝殻の内側が光っていれば、真珠ができる可能性はあります。ただ、できやすいかどうかは別で、現在の養殖では、きれいな真珠層ができやすく養殖もしやすい貝を使って真珠が養殖されています。そのため、海水真珠は日本ではアコヤガイを使って行われていますし、淡水真珠はイケチョウガイを使って行われています。

<小沢>淡水真珠で言いますと、現在中国で非常に多く作られていますが、そこでも貝は同じでしょうか。

<齋木>全く同じ貝ではなく、近縁種のヒレイケチョウガイという貝になります。イケチョウガイは琵琶湖の固有種で、こちらの方が貝の中央に丸みがあり、貝殻が厚めになっています。最近は、琵琶湖でも交雑が進んでいて、純粋なイケチョウガイは少なくなっています。

<小沢>ところで、真珠ができるまでに、どれぐらいの期間がかかるのでしょうか。

<齋木>海水真珠を作るアコヤガイと淡水真珠を作るイケチョウガイでは成長が違いますので、期間も異なりま

す。アコヤガイでは、オペ（細胞を埋め込むこと）してから1年ぐらいで貝を開けて真珠を取りだします。一方のイケチョウガイでは、3年ぐらい成長させてから真珠を取りだします。もし大きな真珠を作りたければ、5年ほど成長させる事もあります。淡水真珠養殖で使うイケチョウガイは時間がかかりますので、3年程度の期間がかかって、ようやくアコヤガイと同じ大きさの真珠ができます。

<小沢>と言う事は、淡水真珠は養殖としては、気が長い話ですね・・・開けるまで真珠のでき具合がわからない、と言う事もありますし。

<齋木>そうですね。とても時間がかかります。イケチョウガイは、真珠のオペができるような貝の大きさになるまでに、3年はかかりますし、その後3年の成長が必要になります。実際にできるまでが合計で6年になります。ただ、オペした後の成長の時間が長い分、真珠層のでき方がアコヤガイとは異なり、淡水真珠の方が、1枚1枚が薄い真珠層が多く重なり合って、真珠層ができます。

<小沢>他に淡水真珠と海水真珠の違いはあるのでしょうか。

＜齋木＞色々な違いはあります、これ以外にも大きいのは、やはり色でしょうか。アコヤガイは薄いピンク色の系統の真珠ができやすいのですが、イケチヨウガイは白い真珠だけでなく、色々な色の真珠ができます。これは貝の種類によって異なり、黒真珠を作るのには、クロチヨウガイが使われたりしています。

＜小沢＞他はどうでしょうか。

＜齋木＞あとは、真珠には無核真珠と有核真珠があり、アコヤガイで作られているのは有核真珠が中心です。一方の淡水真珠の養殖の中心地だった琵琶湖では、無核真珠が主流でした。そこで、出来上がった真珠の形も、アコヤガイは丸い形の真珠がほとんどですが、イケチヨウガイの淡水真珠は、色々な形の真珠ができています。

＜小沢＞核についても教えて頂いてよろしいでしょうか。

＜齋木＞核とは、オペの際に一緒に埋め込むものになります。核は他の貝の貝殻でできていて、これを細胞と一緒に入れる事で、その核の形の真珠を作りやすくなります。例えば丸い真珠は、丸い核を真珠貝に入れる事で、その周りに真珠層を作りやすくし、丸い真珠となります。このように有核真珠は、中に入れる核の形を変えれば、その通りの真珠ができやすくなります。ボタンの形を作りたければ、ボタンの形をした核をいれれば、そんな真珠になります。ただし、自然のものなので、開けて見るまでどんな形かは、なりやすいと言うだけで、正確に核と同じような丸い形ができるとは限らず、一つ一つに違いが生まれます。

＜小沢＞それでは核を入れない無核の場合はどうなるのでしょうか。

＜齋木＞核を入れない無核真珠の場合は、一緒に核を入れずにただ細胞だけ入れます。そのため、形のある異物が入らないので、真珠層のでき方も同じようにならないで、形もまったくバラバラになります。真珠で言うところのいわゆるバロックやライスパール、と言われるような形になりやすくなります。ただ、作り手によって、丸くなりやすい入れ方などのコツを持っていて、それである程度は形を作ることもできます。

＜小沢＞なるほど、核の有無によって、だいぶ異なるのですね。ただ、核を入れた方が、形が見込める分、良いような印象もありますが、どうなのでしょうか。

＜齋木＞確かに核を入れた方が、望んだ形は作りやすいです。ただし、核を入れると母貝に入る異物が大きくなりますので、母貝の負担も大きく、普通は一度に一つしか入れる事はできません。また、母貝の大きさによって入れられる核の大きさも決まってきます。一方の無核であれば、母貝に入る異物が小さいので、一つの貝に一つだけでなく、もっと多くの細胞を入れる事もできます。

＜小沢＞無核の場合、どれぐらいの数を作る事ができるのでしょうか。

＜齋木＞多ければ、一度に50個ほど外套膜を入れて、真珠を作ることもできます。この技術は人によって異なりますので、どうでしょうね・・・30個ぐらいが平均でしょうか。

＜小沢＞入れる場所には違いがあるのでしょうか。

＜齋木＞入れる場所も、無核か有核か、で異なります。無核の場合には、貝の丸みを帯びた部分のあたりの外套膜に細胞を埋め込んでいきます。貝が大きければ大きいほど、多くの細胞を埋め込む事ができます。一方の有核の場合は、貝の体に直接核を埋め込みます。イケチヨウガイの場合は、貝の腸のある部分の脇を薄く切って、その中に核と細胞を一緒に埋め込みます。



淡水真珠

＜写真提供：草津市＞

＜小沢＞有核の場合の体の脇を切って埋め込むとなると、失敗して、成長させている間に貝が死んでしまう事はないのでしょうか。

＜齋木＞失敗した時は、腸の脇ですのすぐにわかります。切り過ぎた時は、黒い腸内のものが出てきます。

＜小沢＞ところで、多くの真珠を作りたいが、貝が死んでしまっては、真珠ができない、という事になりますが、ギリギリまで多くの真珠を取ろうとして、母貝の負担が大きくなってしまった場合、どうなるのでしょうか。

＜齋木＞母貝の負担が大きいと、最悪の場合、言われるように、母貝が死んでしまいます。これは無核でも同じで、オペで負担が大きいと母貝が死ぬ可能性もあります。それ以外にも異物を入れますので、きちんと細胞を埋め込めないと、貝自体が自分の身を守るために異物を吐き出し、貝を開けてみたら真珠ができていなかった、というような事もあります。特に多くのオペを一度にしていると、どの貝が細胞を吐き出したかわかりませんので、開けてみたら真珠がなかった、というような事もあつたりします（笑）。



3. 淡水真珠養殖の歴史

＜小沢＞話をえますが、淡水真珠の養殖は、いつ頃から始まったのでしょうか。

＜齋木＞昭和の初めごろに、滋賀県草津市の琵琶湖の内湖である平湖で始められました。

＜小沢＞草津市が淡水真珠養殖の発祥の地だとは知りませんでした・・・

＜齋木＞そうですね。確かにあまり知られていないかもしれません。琵琶湖の淡水真珠自体は、元々、琵琶湖にいる2枚貝から自然にできたものが偶然発見される事もあったので、このあたりから作ろうとし始めた、と聞いた事があります。その技術開発のために、世界で初めてアコヤガイでの真珠養殖に成功したミキモトの創業者でもある御木本幸吉のもとにいた技術者が、琵琶湖まで来て養殖技術の開発を行った、との事です。その時に、何度も失敗して、最終的にはイケチョウガイが最も養殖をしやすかったため、イケチョウガイで技術を確立し、養殖がおこなわれるようになりました。

＜小沢＞その後、どうなったのでしょうか。

＜齋木＞その後、昭和30年代過ぎから琵琶湖では淡水真珠の養殖業者が急増し、最大で100軒を越える養殖業者が存在する事となりました。その頃には、県の水産試験場でも真珠養殖に必要なオペの教育などもしていて、産業としての淡水真珠養殖の促進をしていました。この養殖では、元からあった内湖が大きな役割を果たしていましたが、昭和40年代半ばの干拓事業で、多くが埋立てられ、農地へと整備されていきました。

＜小沢＞その後、どうなったのでしょうか。

＜齋木＞その後、1980年代後半ぐらいに真珠養殖の廃業が相次ぎ、現在では、琵琶湖で養殖を継続しているのは、4軒ほどになりました。大きな原因は二つあり、一つは琵琶湖の水質の悪化、もう一つは中国産の淡水真珠の登場です。

＜小沢＞なるほど、今、琵琶湖産の真珠をほとんど見かける事もなくなったのは、生産量の減少が大きいですね。

＜齋木＞そうです。生産量は、最盛期には6tを越えるほどの量があったのですが、現在は、数十kgまで減少しています。そのため、ほとんど国内には出回っていません。最盛期もほとんど神戸のバイヤーが買い付けに来て、輸出されていました。

＜小沢＞最盛期には6tですか・・・真珠が6tとなると、どれぐらいの量になるのか、全く想像もつきませんが・・・

＜齋木＞私自身が、近江八幡の西の湖で養殖をしているのですが、この西の湖で最も多い時には年間で1000万個ほどの真珠を生産していました。今は、私しかやっておらず、一人でやるとなると最大で2万個ぐらいが限界



冬の近江八幡の西の湖養殖場



イケチョウガイ

です。今は、そんなには作っていないですが。

＜小沢＞普段見る真珠の数と単位があまりにも違うので、すごい、と言う以外になかなか言葉もないですが（笑）。ところで話を戻しまして、減少した理由をもう少し詳しく教えてもらえますか。

＜齋木＞一つ目の琵琶湖の水質の悪化ですが、養殖真珠を作るためには、貝が育つ必要がありますし、またきれいな真珠層を作らないとなかなか商売としてやっていけません。真珠の養殖は内湖でやっていましたので、水質の悪化の影響を大きく受けました。悪化によって、貝が大きくなるまでに時間がかかり、またきれいな真珠ができにくくなりました。さらに、イケチョウガイが死ぬことも多くなり、継続する事が難しくなりました。

＜小沢＞琵琶湖の自然環境の影響は大きかったのですね。

＜齋木＞自然環境との関わりで言えば、真珠養殖業者は増えるのですが、自然繁殖して漁獲されるイケチョウガイの漁獲高は減っていました。真珠養殖に使うための母貝の養殖もされていたのですが、数が多くはなく、実際には、琵琶湖で取れる自然繁殖したイケチョウガイに頼っている部分も大きかったです。しかし、このイケチョウガイ自体が取れなくなり、その事も減少には影響しています。

＜小沢＞なるほど。ところで、中国産の淡水真珠の影響はどうだったのでしょうか。

＜斎木＞中国産の淡水真珠は、低価格の物が世界的に出回ったので、値崩れを起こし、琵琶湖で淡水真珠養殖をやつても、儲からなくなりました。また、自然繁殖をしていたイケチョウガイが減少していたので、母貝の単価も上がっていました。同時期に琵琶湖の環境悪化も起きましたので、真珠の買い付けに来るバイヤーも日本から中国へ買い付け先を変えていきました。

＜小沢＞現在は、真珠の養殖環境としてはどうなのでしょうか。

＜斎木＞現在は、水質も良くなり、イケチョウガイの成長も良くなっています。ただ、中国産の淡水真珠には、価格面では勝てません。向こうとは養殖規模が違うものもあります。このあたりが、なかなか難しいところで、今できる事は、真珠の質を上げるしかありません。ただ、養殖者が減ったので、生産量も減り、生産しても、真珠を買い付けて回っているバイヤーからは、ほとんど注目されなくなりました。養殖が盛んだった頃は、インドや中東からバイヤーが来て、真珠を直接買い付けていったのですが。

＜小沢＞だいぶ変わりましたね。

＜斎木＞そうですね。一度生産量が落ちてから、全く新しく真珠養殖を始めよう、とする人も出ていますので、養殖をした事のある人、するためのオペの技術を持って

いる人も高齢化が進み、このまま行くと、琵琶湖での淡水真珠養殖が無くなっていくと思います。以前養殖をやっておられた方で、すでに亡くなられた方も増えてきつつあります。



近江八幡漁業組合の琵琶湖環境保全活動（藻の撤去作業）

<「琵琶パール（琵琶湖産真珠）」Facebookより>

「琵琶パール（琵琶湖産真珠）」Facebook

<https://ja-jp.facebook.com/biwa.pearl>

滋賀県真珠養殖漁業協同組合の組合員である株式会社三枝が、琵琶パール（琵琶湖産真珠）を紹介しています。

4. 養殖に携わるきっかけと今まで

＜小沢＞高齢と言えば、斎木さん自身が1964年の卒業ですので、けっこうなお歳になっておられます。そもそも真珠に関わってどれくらいになるのでしょうか。

＜斎木＞そうですね。もう四半世紀を越えたと思います。正確にどれぐらい・・・というの覚えていませんが。

＜小沢＞そもそものきっかけは何だったのでしょうか。

＜斎木＞父親のやっていた事を継いだ、と言う事ですね。

＜小沢＞というと、元から真珠の養殖に関わっていらっしゃった、と言う事でしょうか。

＜斎木＞いえ、父親は、元は県庁の職員をやっていて、農林水産課にいた際に滋賀県真珠養殖漁業協同組合の設立に関わり、退職後に事務局長になったところから関わりが出てきます。その後、父親は、養殖も行い始めたところで倒れてしまい、その養殖の後を継ぐ人が誰もいなかつたため、引き継ぎました。それまでは、普通にサラリーマンをしていましたので、全く真珠養殖の事も考えた事はありませんでした。

＜小沢＞それで養殖を始めるのは、大変だったのではな

いでしょうか。

＜斎木＞養殖に関わり始めた頃は、父親が始めたばかりの状態で倒れてしまった後でしたので、真珠が取れるまでが大変でした。妻も経験した事がなかったので、県の水産試験場での講習を受けて、オペができるようになって・・・というところからの開始でした。その頃には、伊勢の方からオペのために人に来てもらって助けてもらったりもしています。

＜小沢＞それはまた、さらに大変な状況ですね。

＜斎木＞いえ、その後の淡水真珠養殖の悲惨な状況を考えれば、たいしたことはなかったかもしれません。その頃は、真珠を作ればいくらでも売れるような状況でしたので、淡水真珠があまり作れなくなつてからは、逃げそこなって貧乏くじを引いた、といつも言っています（笑）。

＜小沢＞その後、組合の組合長になられたわけですが、いつもからやっておられるのでしょうか。

＜斎木＞確か1995年ぐらいからだったと思います。

＜小沢＞ずいぶん長いですね・・・

＜斎木＞そもそも、組合長になったのも、貧乏くじを引いたからです（笑）。組合長になったきっかけは、当時、実際に養殖している業者も減り、組合の解散話が出たと

ころから始まります。それまでは、県の水産会館に組合があり、そこで事務員を一人雇用して組合事務をやっていました。それなりの額を取って組合の運営をしていましたが、会費の負担の大きさと、経費がかかりますので、このままでは持たない、と言う事でした。そこで、解散話の出た時に、私が、一旦解散すると、もう一回作るのはできないだろうから、会費を減らして、組合の事業規模を縮小して、それで存続させた方が良い、という話を言いだしました。

＜小沢＞なるほど、それで責任とってやってください、と言う事になったわけですね（笑）。

＜齋木＞そうです（笑）。帳簿をつける事から会員の管理から、言い出しちゃが個人でやる事になり、組合長を引き受けました。その後、誰にも押し付ける事ができず…（笑）

＜小沢＞確かに、その後、養殖をされている方もどんどん減って行きましたので、なかなか難しいですね（笑）。

＜齋木＞ただ、最近、本当に解散を考えなければいけない状況に近づいてきています。組合員数の維持そのものができなくなってきていて、難しい状況になってきています。

＜小沢＞しかし、今後の可能性も考えると、なかなか解散はしにくいですね。

＜齋木＞私もけっこうな高齢になっていますので、後に引き継げれば良いのですが…

＜小沢＞さて、先の見えない話になってきましたので、少し戻しまして…・真珠に関わっては、養殖以外にも何かされてきたのでしょうか。

＜齋木＞そうですね。面白いものでは、真珠に穴を開ける機械を作ったりしました。

＜小沢＞それはどんなものでしょう。

＜齋木＞真珠に穴を開ける際には、片側からだけ針を刺

したら針の出口の真珠層が割れてしましますので、両方から針を指して、真ん中まで達したら片側の針で貫通させる、という機械を作りました。けっこうな精度が必要でした。たぶん、今でも中国などでも使われていると思います。もう、好きに使ってくれ、と言う事で譲っていましたが。

＜小沢＞それは珍しいものを作られましたね。

＜齋木＞昔は、西の湖で真珠養殖をしつつ、東京にも会社を持っていました。そっちは、プリンターなどのケーブルを作って販売すると言う事をしていました、特許も持っていましたので、けっこううまくいっていました。そっちの会社の運営は、人任せでしたが、ちょうどパソコンが出始めたころでしたし、けっこうな売上がありました。ただ、最後は持ち逃げされて、それで会社を清算しました。その時に、銀行への報告に行くために東京に行って以来、東京には行っていません（笑）。

＜小沢＞何か色々とやってこられていましたね（笑）

＜齋木＞そうですね。会社を閉めてからも、製品検査の仕事は回っていましたので、滋賀で検査の仕事だけはやっていたりしました。こういった仕事が回ってたり、特許もまだ持っていますので、そっちの収入も含めて、真珠が一番苦しい時期を乗り切ってきています。

＜小沢＞なるほど。

＜齋木＞他にも真珠が落ちている時はなんでもやりました。穴あけの機械を使って、穴をあけて紐を通す、と言う仕事も受けて、それを近所の人に手伝ってもらいました。海外から真珠を入れて、その真珠を加工して、香港に輸出する、という形でした。これはけっこう収入があがりました。ただ、同じ事を中国でもやり始めて、単価が10分の1ほどで向こうはやっていたので、太刀打ちできず、この仕事はなくなりました（笑）。



琵琶パール



＜「琵琶パール（琵琶湖産真珠）」Facebook より＞

5. 今後に向けて

＜小沢＞そろそろけっこうな時間もたってきましたので、最後に、今後に向けて、いくつか取り組んでいらっしゃる事を教えて頂きたいのですが、いかがでしょうか。

＜齋木＞楽しく生きていきたいと思っていますので、まだまだ色々と取り組み続けていきたいと思っていて、いくつかアイデアがあります。

＜小沢＞例えばどんな事でしょうか。

＜齋木＞真珠に直接関わる事としては、イケチヨウガイの母貝の卵からの養殖を継続していくことです。イケチヨウガイの卵は、魚のエラについて、貝の形になるまで過ごします。魚のエラにうまく着けば良いのですが、今までやってきて、いまいちつづきが悪い状況です。そこで、きれいな水で育った魚を持ってくれば、つきが良くなるのではないか、と思い、今年からチャレンジしていきます。

＜小沢＞具体的には、どういう形でやられるのでしょうか。

＜齋木＞醒ヶ井養鱒場がありますが、あそこで育てられたマスはきれいな水で育っていますので、卵のつきも良いのではないかと思っています。なんでもチャレンジして、検証しなければ済みませんので、一度やってみようと思っています。また、水もきれいな水の方が良いだらうと思いますので、井戸水を取ってきて・・・と思っています。



養殖漁場風景 <「琵琶パール（琵琶湖産真珠）」Facebookより>

なるでしょうね。

＜小沢＞それ以外はどうでしょうか。

＜齋木＞真珠で言えば、真珠が漢方薬では、材料の一つとなっているのは知っているでしょうか。

＜小沢＞あまり詳しくは知りませんが・・・

＜齋木＞現在、「救心」という漢方薬に真珠の粉が入っていて、これが肝臓や心臓に効くと言われています。この基となっているのは、真珠層を作る外套膜ですので、外套膜の成分を分析すれば、何か成分のヒントがあるのでないかと思っています。

＜小沢＞アイデアは尽きないです・・・

＜齋木＞他にも今、具体的に動いているのは、瀬田シジミの養殖への関わりと、ファンドとの関わりです。

＜小沢＞それぞれ詳しくお聞きしたいですが・・・

＜齋木＞瀬田シジミについては、水産試験場経由で話が来たのですが、自然に増加するまでつないでいきたい、と思っています。西の湖は水質が良くなっていますので、イケチヨウガイの養殖のための網に自然にシジミが湧いてくる状況にもなっています。瀬田シジミが増加しないのは、きっと砂地との関係もあるのではないか、と思って、砂地の増加も含めて、色々取り組んで行けるのではないか、と思います。今、漁師も高齢化をしていて、シジミを探っている漁師も10人ほどとだいぶ減っているそうです。その漁師が底をさらわず、藻が生えて砂地が維持できていない可能性もありますし、色々あります。こういう事を変えていかなければ、と思っています。

＜小沢＞ファンドの方はどうなのでしょうか。

＜齋木＞元々は、ふるさと雇用再生事業で補助金をもらった事から始まったのですが、終わってからも続けなければいけない事があって、その資金のためにも、募集しました。2013年にミュージックセキュリティーズファンドというところで、一般の方向けに、「琵琶パールファンド」という名前で募集しました。この償還が2017年になりますので、その時まできちんと出資者に出資分以上にお返しする事を考えています。



船上作業風景 <「琵琶パール（琵琶湖産真珠）」Facebookより>

＜小沢＞うまくいけば、どうなっていくのでしょうか。

＜齋木＞うまくいけば、年間10万個ぐらいのイケチヨウガイを育てる事ができると思います。そうすると8万個ぐらいの母貝になりますので、4~5人が淡水真珠の養殖に関わっていけると思います。だいたい一人がオペレートで年間で2万個ぐらいが限界ですので、それなりの数の真珠を養殖できます。そうすると琵琶湖の淡水真珠の復活の人口ぐらいにはなるかな、と思っています。バイヤーに対して、きちんとアピールできるだけの量にも

＜小沢＞まだ夢はありますね（笑）。

＜齋木＞そうですね。今思っているのは、今後養殖に関わっていく人を育てていきたい、と言う事です。そのためには、個人で教えるのには限界があってアカデミーのような形で教育ができるいければ、と思っています。

＜小沢＞なぜ個人では限界があるのでしょうか。

＜齋木＞今まで個人で技術の継承をしてきましたが、どうしても職人的な部分に偏ってしまって、真珠全体の状況や海外での技術の状況など、幅広く学ぶことができていませんし、教える事ができないと思います。今までは、職人が、自分が良いと思うものを生産する、と言う事が主になっていましたので、消費者がどんなものが欲しいのか、と言う事に関しても意識が薄かったと思います。

ただ、消費者が欲しいものを作れなければ、淡水真珠養殖の復活はないと思います。そのためにも、ぜひアカデミーのような多くの人が一人の成長に関わるような機会を作りたいと思っています。

＜小沢＞最後に大きな夢まで教えて頂き、ありがとうございました。齋木さんもけっこうなお歳になっているかと思いますが、まだまだ引退は出来そうもないですね（笑）。

＜齋木＞本当は早く引退したいのですが、ただ周りが引退させてくれず、仕事をどんどん持ってきてますので、まだまだ引退できそうもないです（笑）。

＜小沢＞本日は、どうも長時間にわたり、また新年早々時間を割いていただき、ありがとうございました。

【組合概要】

- ・滋賀県真珠養殖漁業協同組合
- ・設立年：1959年（昭和34年）
- ・組合事務所所在地：滋賀県近江八幡市古川町513

【淡水真珠養殖概要】

1910年～1927年…

淡水真珠養殖を試みるが失敗

1930年…

草津市平湖にて淡水真珠養殖に成功

1937年…

海外への輸出を行う。その後戦争を挟んで拡大へ

1960年代…

日本各地（霞ヶ浦等）へ真珠養殖の移植

1980年代後半…

琵琶湖の水質悪化および中国産淡水真珠の増加により急速に衰退

2000年代以降…

水質が良くなり、再度安定した淡水真珠養殖が可能となる



＜「琵琶パール（琵琶湖産真珠）」Facebookより＞

ACROSS ネーミングの由来

BKCのシンボルである、経営・経済両学部の図書研究棟「アクロスウイング」に由来した名前です。ACROSSには交わる・交差するという意味があります。「アクロスウイング」はその名の通り、知と情報が行き交うアカデミックな「交差点」であり、未来に羽ばたく人材をイメージした名称です。

私たちも大学と産業界との交差、若い学徒とベテランの実業家・ビジネスマンとの交差を通じて、新しい経営学を創造しようと考えています。経営学部校友会は、21世紀への飛翔を目指した、産官学交流の組織もあります。そこで、この会報を「ACROSS」と名付けました。

編集後記

今回インタビューをして、改めて滋賀県の様々な事を知らない事に気づきました。経営学部がKICからBKCに移転して20年経ちました。けっこう長い間滋賀県の草津市にあるBKCで過ごしてきました。その中で地域と共に過ごしてきたはずですが、積極的な関わりが少なかったかもしれない、と私自身は反省しています。来年からOICへとキャンパスを変えて新たな展開をしていきますが、その中で、キャンパスのある大阪府茨木市との積極的な関係を結び、また学びへとつないでいければ、と思っています。